

東京帝国大学建築学科

工学化と「ヴァースムート」の時代

前川國男は一九二五年（大正十四年）四月、東京帝国大学工学部建築学科に入学する。同級生には建築家として活躍する谷口吉郎や市浦健、構造設計家として前川のよきパートナーとなる横山不学^{ふがく}らいた。入学時の建築学科は教授が伊東忠太、関野貞、塚本靖、佐野利器^{じしかた}、内田祥三^{よしかず}であり、助教授が岸田日出刀^{ひでと}と長谷川輝雄という陣容だった。谷口の回想によれば入学当時は伊東が学科主任で日本建築史を講じ、塚本が建築計画、内田が建築構造と都市計画、佐野が耐震構造、岸田と長谷川が設計製図を教えていた。⁽¹⁷⁾象徴的なのは伊東と関野が一九二六年度で定年退職し、前川の卒業年度となる一九二七年四月時点では教室の中心が佐野と内田に移ったことである。それは建築教育の重点が

歴史学から構造と計画という技術重視の実学ヘシフトしたことを意味する。建築評論家の藤井正一郎はこの転換を「工学化」と名づけ、次のように論じていた。

「伊東忠太の提唱によって、造家学科が建築学会に改称された明治三十年ごろ以後から、わが国建築界は、一時特にボザールの色彩を強めたが、しかし、わが国の場合、すべての技術が、富国強兵・殖産興業という、国家使命に奉仕することが求められた当時においては、西欧的建築様式が、国家の威信を高めるためのものである限りにおいては、ボザールの色彩も許されたが、要は、そのような国家的使命に役立つ即効的技術を、器用に使いこなすことの方が重要であったという面がある。特に建築の場合、耐震という点で独自の技術をつくり上げていかなければならないという



前列中央に岸田日出刀（左）、佐野利器（右）。その右隣に塚本靖。中列左から3人目に前川國男、4人目に横山不学。右から3人目に谷口吉郎。後列右から3人目に市浦健（1925年4月ごろ）

ところから、やがてその「工学化」の傾向が強化される時代を迎える。それは、佐野利器が活躍する明治末から大正にかけての時期であり、そしてその方向を決定的にしたのは、関東大震災であった⁽¹⁸⁾。

前川は、このような転換期に建築を学びはじめたのである。残念ながら東京大学に保管されている卒業設計を除き、前川が学生時代に描いた図面類はひとつも残っていない。そうしたなか、学生時代の前川を知る手がかりとして、同級生の西村源与茂が戦後に記した次のような回想がある。

「前川が設計家としての素質を見せ出したのは僕一人だけの見方かもしれないが、確か二年生の中頃だったと思う。

ある学校の設計製図が一寸異彩を放っていた。それまでの彼の製図は東京工大の谷口君を除いて我々と大同小異であった。その頃から彼は漸次頭角をあらわして来た様に思う。

製図についてもう一つの思い出は故佐野先生との事件である。（…）課題は忘れたがある設計製図が教室の廊下に張り出された。講評は佐野先生である。番が廻って前川の図面の前に立たれた。開口一番、佐野先生は「前川君、この図面は何だ。君は正気かね。ふざけている。」「僕は正気です。真面目です。」と前川。

瞬間二人は殺気だった。居合せた一同は思わず「ハッ」となった。しかし前川は一步も退かなかった。彼の強情は



講義室にて。前川國男（中央白衣）と同級生たち（1925-27 年ごろ）

強情をもって鳴る佐野先生をも圧倒した感があつた。彼の強情は今も尚止むことを知らない。この強情こそ今日の建築家前川を完成した原動力に他ならないと僕は思っている⁽⁹⁾。

佐野が激昂したのも無理はない。彼は「国家の建築的要求は実利を主としたる科学体であり又あるべき事は当然である無意味の贅事に浮身をやつして居られる時ではない」とし、「日本の建築家は主として須く科学を基本とせる技術家であるべき事は明瞭である」と主張していたからだ⁽²⁰⁾。

ところで西村の回想にもあるように、同級生のなかで設計をリードしていたのは谷口吉郎だった。前川も後年、「じつにうまいんだね。僕らの手のつけ方とは違うんだね。彼自身の方法論をもってたよ」と回想している⁽²¹⁾。しかしその一方で、同級生の市浦健は「学校に居るときからはつきりと建築家を志して居たのは前川君だけだったということを知りたくなかった。勿論谷口吉郎君も将来デザイナーの方へ進むことが誰からも期待されていたが、そのたどったコースは前川君のように純粹な建築家としてのそれとは大分違っていた⁽²²⁾」と証言しており、前川の建築家を志す一途な姿勢が伝わってくる。そして前川自身は戦後、先輩格の堀口捨己^{すてみ}が出席した座談会で大学時代の教育について次のような感想を述べている。

「私個人の経験をお話しますと、学校で教えられたことに
関して、どうも一向に情熱を感じなかった。いまにして思
うのですが、例えば建築歴史を様式史といった形でしか教
えられなかったのは残念だったと感ずるのです。もう少し
文化史的な背景をもった教え方をしていたらいいかもしれ
ない。当時学校に対して情熱をもっただろうということをつく
づく感ずるのです。当時先輩の方は大体分離派以後の方で
すが、そういう方がいろいろ議論もし、作品も作られている
ことも知っておりましたけれども、堀口先生をここにおい
てそういうことを申すのは何ですが、これにもあまり情熱
を感じなかったのは事実です。当時学校でわれわれのクラ
スでは「バスマーツ（ヴァスマート）」というドイツの雑誌
がありました、あれが毎月くる。あれにはコンテだか4
Bだかの柔らかい鉛筆でえらく勢いのいいスケッチが書い
てある。そういうデザイン図面がいっぱい載った雑誌が
くるのです。クラスでも「バスマーツ」が大体中心だった
と思います、みんな熱を上げている。これも率直な話、
私自身はどうもあまりピンとこなかった。（…）僕はヨー
ロッパの建築を様式史として教わってきたが、例えばギ
リシアの神殿であるとか、ゴシックのお寺であるとか、そ
の時代のシンボリックなそういう建築を中心にした建築史と
いうものは教わったけれど、それを生んだ背景に関する知

識は何もなかったわけです。ギリシアにしても、ローマに
しても、中世にしても、その時代の普通の人間がどうい
うふうにして生きていたか、という日常生活の問題、その底
辺をなしている人間の日常生活について全然知識がないと
いうことはえらく片輪のような気がするのです」

ここには、前川が学生時代に抱いた建築教育に対する根
本的な疑問が語られている。当時の前川は華々しく活躍し
ていた堀口ら分離派の仕事からも、同級生が「熱を上げて
いた」ドイツ建築の流行からも離れていたのである。

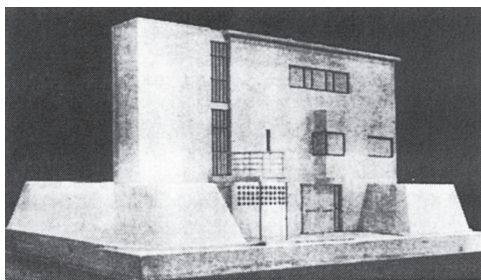
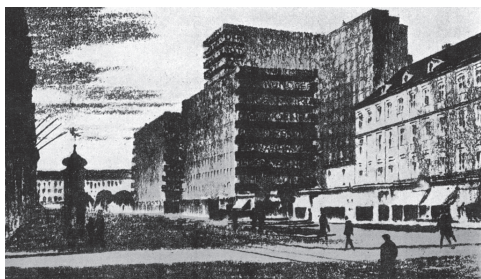
「告白」を語らる

前川自身の発言によれば、ル・コルビュジエに最初に惹
かれたのは建築雑誌に掲載された小さな住宅だったという。
「〈ヴィヴァント〉にね、ヴォークレッシンのヴィラの写
真が出てね、びっくりしたといえぱびっくりしたけど。ま、
しかし、とりこになったのは彼の本を読んでからだね」

その写真とは、前川が建築学科の図書館で手にしたであ
ろうフランスの建築雑誌「アルシテクチュール・ヴィヴァ
ント」一九二三年冬号に掲載された、「ル・コルビュジエ」
という名前ではじめて発表した建築家としての第一作、ヴ
ォークレッシンのヴィラ（ベヌヌス邸）の模型写真のこと
を指している。その後、この雑誌にはル・コルビュジエ

の主要な建築作品とテキストが繰り返し紹介されていく。前川も、この最初の出会い以降、その記事に注目していったにちがいない。けれども、この発言にもあるように本格的に関心を抱いたのは彼の本を読んでからだ。次のような回想がある。

「私の先生に岸田日出刀先生という方がおられて、助教のころ、ヨーロッパに行かれたわけです。で帰りにね、コルビュジェの本を買って来られた。それでぼくに、お前はフランス語が読めるんだからこれを読んでごらんと貸して



上・「ヴァスムート」誌 1926 年 6 月号掲載の図版。
下・ベスヌス邸模型（ル・コルビュジェ、1923 年）

いただいたのが、まとまったものを読んだ初めてですね。それでこれも一冊読んだら次から次へと、何となく惹かれて、四冊か五冊あったと思うんですが、読んじやった。(・) 四、五冊読んだおかげで、こりやどうしてもコルビュジェの所へ行こうと決心して、それから手紙を書いてね、実は自分はどうしても貴方の所へ行きたいんだと。そしてパリには幸いぼくの伯父がいるから、行けば生活だけは何とかなるだろうなんてね、勝手なことを書きまして、手紙を出したんです。そしたらそれが、瓢箪から駒が出ましてね、本当になっちゃったんです。(・) その返事にぼくはびっくりしたんだけど、実はお前の手紙を受け取ってから間もなく、お前の伯父にジュネーブで会ったっていうんです。で伯父さんも賛成しているから来いという手紙が来ましてね……当時はエアメールなんてないから、シベリア経由で往復してたわけです。まあそういうことで行くことになりまして、ぼくは学校を卒業したその卒業式の晩にシベリア鉄道でパリに行ったわけです」

前川は、大学の恩師で当時はまだ二十代後半の若い助教授だった岸田日出刀（一八九九—一九六五年）が海外出張中の一九二六年五月にパリで購入し、貸し与えたル・コルビュジェの五冊の本を読んで、彼に強く惹かれていったのである。後年、前川は次のように記している。

『建築へ』、『ユルバニスム』、『今日の裝飾芸術』、『近代絵画』等、主として「エスプリ・ヌーボー」から再録された初期の彼の著書は建築の設計とはどうやってやるものか五里霧中で迷っていた学生の私にとって文字通り闇夜の灯であった。

「：青年達にとって大都会はその扉にとざされて、人はそのなかにフォークの響きを耳にし乍らも空しく飢に死なねばならぬ沙漠であった：」

『今日の裝飾芸術』の巻末に誌されたコルビュジエ半生の「告白」を諸んじる程読み返した私はついに矢も盾もたまらなくなつて一九二八年三月三十一日卒業式の夜、東京を發つてシベリヤの荒野をバリにはしつた⁽²⁷⁾

前川はル・コルビュジエの建築家としての姿勢に惹かれたのである。そして、その背景に何があつたのかについては、後年次のような回想を残している。

「コルビュジエは書いたものなどを通してみると、徹頭徹尾、合理主義者だが、合理主義そのものの価値が問われはじめている時節に、なぜ僕はそういう彼のところへ行つたのだらうかと考えてみると、もちろん、パリの華やかさに對する憧れと、社会的関心というか、建築家はたとえば、住宅難解決に對する強烈な使命感のようなものがあつた。

私が学生の頃にはドイツ表現派はなやかな頃で、「ワスム

ート(ヴァースムート)」という建築雑誌が争つて読まれたけれど、そういう影響はぜんぜん受けなかった。もっと理づめに考えなければいけないと思つていた。

まだ高等学校の時、ジョン・ラスキンの『建築の七燈』とくにその第二章「真実の燈」を読んだことが影響あると思う。考えてみると、建築家としての僕の今日までの仕事は、つまるところ「建築の真実」とは何か、という自問自答の苦行であつたというひとことに尽きていたと思う。

「：度重なる戦火もゴシックの建築を滅ぼすことはできなかった。しかしゴシックがその建築の真実を喪つた時に、ゴシック建築は滅びた：」といったラスキンの言葉が、今日に至るまで僕の脳裡に灼きついて離れない⁽²⁸⁾

前川は高等学校時代に読んだジョン・ラスキンの『建築の七燈』を通して「建築の真実」とは何かという視点を得ており、ル・コルビュジエの本のなかに、それと連なる理性的なものがあると直観的に感じとつたにちがいない。実際に、『今日の裝飾芸術』にはル・コルビュジエがラスキンにふれた文章が綴られている。あるいは前川は、ル・コルビュジエの本のなかにラスキンについての記述を見つけたことがきっかけとなつて彼に惹かれたのかもしれない。

上記の回想はその可能性を示唆している。

ところで、前川がバリへと渡る際にその身元引受人とし

て自宅に預かることになった伯父の佐藤尚武は、次のような回想を残している。おりしも佐藤は一九二七年から一九三〇年まで国際連盟帝国事務局長を務めていた。

「何かの委員会でジュネーブのホテル・メトロポールに泊まっていたところ、はからずも当時パリで有名であった若手建築家のル・コルビュジエの訪問を受けた。初対面のこの人の来た目的は、当時懸賞募集中であった国際連盟の殿堂の建築のことについてであったが、彼は私にたいし、初対面ではあるが、多少の関係がないわけではないといっているがけなく甥の前川國男から来た手紙を見せてくれた。

それによると、なんでも國男は在学中から、新しい構想を持ったコルビュジエに大いに私淑していたらしく、卒業と同時にパリに来て、コルビュジエのアトリエで勉強してもらいたい、幸いにパリには伯父の佐藤がいるから、生活の方はなんとかしてくれるであろう——という趣旨であった。そしてコルビュジエは、自分のアトリエは世界各国の若い建築家に開放しているのだから、前川君も喜んで引き受けるということであった」⁽²⁹⁾

図らずも一九二七年に起きた国際連盟コンペのル・コルビュジエ案をめぐる騒動が、前川とル・コルビュジエを結びつける触媒のような役割を果たしたのだ。同時に、時代の偶然が引き寄せた幸運な人と人との出会いがあつてはじ

めて前川はル・コルビュジエに学ぶことができたのである。

前川が建築を学んだ一九二五年から一九二八年の日本は、けつして明るい未来を思い描けるような時代ではなかった。関東大震災直後の混乱と将来への不安、戦争の足音、自由な言論の制限など不透明さに閉ざされつつあった時代である。しかし、だからこそ無名に等しかったル・コルビュジエの言葉にふれて、そこに時代の可能性を直感したのである。戦後の対談のなかに次のような発言が記録されている。「どういう点で影響をうけたということになると、それはコルビュジエに弟子入りのした人の個人個人によって分違うと思います。けれども私個人の場合から考えてみますと、その人となりや、個々の作品自体から、非常に感銘を受けるものが多いわけです。いや、そう申し上げるよりも、コルビュジエという人間そのものの生活態度というか、その物の考え方のほうに、より以上心をひかれたといったほうがいいでしょう」⁽³⁰⁾

この言葉からも読みとれるように、前川はル・コルビュジエの人間性とその考え方に自分の生涯を重ねようと思ひ定めたのである。一九二七年、前川は二十二歳だった。